

■ 小寺健吉 《初秋の湖畔》

子供の頃の思い出を醸し出す絵

この絵は、私がコレクションを始めた頃に入手した最初の絵である。

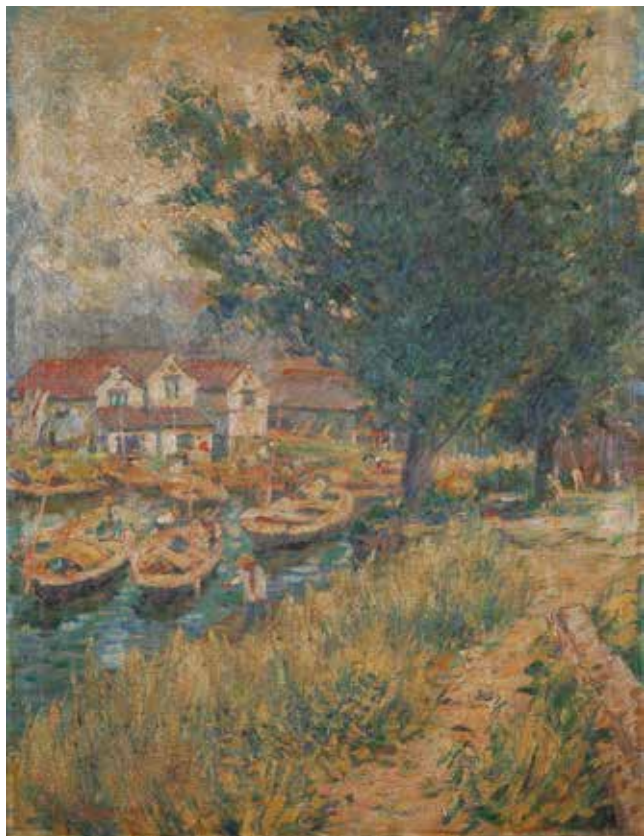
この絵を初めて見た時、小学頃の夏休みの宿題で、裏山の大きな木の下に座り、眼下一面に広がる稲穂の先の八王子の市街地を描いた時の、爽やかな風が頬を撫でていたことを想いだした。釣り人と私の記憶とは大きな開きがあるが、共通するのは大木の下を吹き抜ける風そのものである。風には色が付いていないが、画面全体から一陣の風が吹き抜けてくるのは私の想像力の逞しさからだけであろうか。

この油彩は、小寺健吉が東京美術学校を卒業した翌年（一九一二年）の初期の作品である。光と色彩の柔らかなタッチはモネの《日傘をさす女性》を連想させる。まだ小寺が渡欧する前の二五歳頃の作品であるが、すでにヨーロッパ印象派の影響を色濃く受けていたことを推測させるものである。

この絵のタイトルはキャンパスの裏の木枠に書かれているが、残念ながら「初秋」に続く文字が黒塗りされているため読めない。二五号の大きさのため展示会用に描かれたと思われるが、展示会出品に際しタイトルを変更したため、黒く塗りつぶしたことも考えられる。正式なタイトルが不明なため、今回の出品に際しあえてタイトルを《初秋の湖畔》とした。

太田貞雄（東京都八王子市）

小寺健吉 《初秋の湖畔》
油彩・キャンパス 80.0 × 60.5cm 1912 年



小寺健吉（こでら・けんきち／1887-1977 年）
岐阜県生れ。1911 年東京美術学校西洋画科卒。14 年光風会展で今村奨励賞。23 年渡仏。24 年光風会会員。27 年再渡仏。28 年帝展で特選。65 年画業 50 年展開催。風景画を得意とする。70 年日展参与。東京で没。90 歳。

中村研一 《裸婦》

清楚感漂う裸婦

よく中村研一の絵のコレクションの動機を聞かれる。たまたま入手したバラの油彩を鑑定人である夫人のところに鑑定のため持参したところ、夫人より「美術館所蔵の絶筆のバラの絵よりもこの絵の方が素晴らしい」と言われ、気を良くしたので始まりである。

絵を褒められるのは、それを所持している私を褒められているような気分になるものである。コレクターなら誰しも経験のあることで、コレクター冥利とも言える。それ以降、手の届くもので気に入った作品があれば入手している。現在中村研一の油彩は《裸婦》を含め六枚に至っている。

中村研一の履歴を見ると、代々木にあったアトリエは戦災に会い、アトリエにあった絵の全てが灰塵に帰したとのことである。コレクターとして希少作品、とりわけ滞欧作品を入手したいと考えていたところ、不思議なことに滞欧作の《裸婦》が私の手元にやってきた。一期一会か。

この《裸婦》は、中村研一の作風の特徴である「明暗の対比」がはっきりとしている。体全体の輪郭が影のように骨太に描かれており、これが裸婦としての肉感を際立たせる一方、裸婦によくある「エロチシズム」は影を潜め、凜とした清楚感を漂わせている。

さらに、この八号の作品は、同じモデルを描き第九回帝展（一九二八年）で特選を受賞した一〇〇号の《裸体》と比べても、勝るとも劣らぬ一品と自負している。

太田貞雄（東京都八王子市）

中村研一 《裸婦》

油彩・キャンパス 45.4 × 37.8cm 1928 年



中村研一（なかむら・けんいち／1895-1967年）
福岡県生れ。鹿子木孟郎の内弟子。本郷洋画研究所に通う。1920年東京美術学校西洋画科卒。帝展で特選。23～28年渡仏。サロン・ドートンヌ会員。帝展で連続特選。帝国美術院賞。50年日本芸術院会員。東京で没。72歳。

■ 中村研一 《読書婦人》

再評価すべき剛毅な画風

中村研一は日展の巨頭であり、光風会の重鎮として日本芸術院会員にまでなった画家であるから、前衛美術を好む「わの会」の会員には余り関心はないかも知れない。

しかし、福岡県の有名中学の同窓であった児島善三郎と相前後してフランスに行き、印象派以後のフォーヴィスムの興隆や立体派から超現実主義まで百花繚乱のパリ画壇の激動を身をもって体験してきたのであったが、帰国後児島善三郎は独立美術協会を創立して、官展批判をする一方、中村研一は有り余る才能ゆえに帝展のホープとして取り込まれ、対立する立場に立つことになったのは歴史の非情なところであった。

しかし、中村研一はフランスで研鑽した新しい技法を基本にして、日展の伝統的技法は修正して、描くべき対象に対しては真直に対応し、その内なる真実を引き出す剛毅な画風を確立したのであった。

我々は今この中村研一の簡朴にして、剛健に表現する画風は再評価すべきだと思っている。

《読書婦人》は一九二八年頃の中村研一滞欧中の作品であり、画中の婦人は外国人である。

この頃、中村は官立美術学校出身という出自の似ていて、独自の道を切り拓いて頭角を現してきたモーリス・アスランと親交を結び、灰色を基調とした色数の少ない、かつフォルムの大さき穏健着実な画風に強い影響を受けたといわれる。

小川榮吉（埼玉県川口市）

中村研一 《読書婦人》

油彩・キャンパス 44.0 × 38.0cm 1928 年頃



中村研一（なかむら・けんいち／1895-1967年）
福岡県生れ。鹿子木孟郎の内弟子。本郷洋画研究所に通う。1920年東京美術学校西洋画科卒。帝展で特選。23～28年渡仏。サロン・ドートンヌ会員。帝展で連続特選。帝国美術院賞。50年日本芸術院会員。東京で没。72歳。

■ 大沢鉦一郎 《裸の自画像》

独学で、しかも若くして大正画壇を代表するひとりに

大沢鉦一郎は、一八九三年名古屋市に生まれ、文芸雑誌『白樺』などの影響をうけつつ主に独学で絵画を学んでいる。この《裸の自画像》と同じ一九一六年（二三歳）作で東京国立近代美術館の常設室にときおり展示される《母の像》は、同じ壁面にしばしばかかる岸田劉生や中村彝、村山槐多、関根正二らの傑作に優るともなら劣ることはない。早くから相当な実力をたくわえている。

ところが翌一九一七年、草土社名古屋展で岸田劉生の作品を初めて見た大沢は、おおいに思うところがあった。さっそく宮脇晴らを誘って洋画グループ「愛美社」を結成。そして、劉生芸術に影響をうけつつ迫真の写実絵画を発表していく、大正期の愛知洋画壇に新風を送りこんでいる。ただ、中央画壇への進出は思うにまかせなかった。文展などには落選つづきだったのである。

一九九三年、私どもの画廊での生誕一〇〇年大沢鉦一郎展で、この《裸の自画像》を展示した。そのおりは、大正期の全油彩作品収録をめざした作品集の製作にかまけたか、画家自身による額装など私は仔細にチェックしていなかったようだ。

その展覧会が終って、愛知県内四つの公立美術館に大沢作品を数点ずつお納めしている。しかし《裸の自画像》は、どこからもご所望されなかったので、そのまま私どもの保管庫にほとんど眠ってしまふことになった。次の生誕一一五年展のおり、この作品をもとにある新聞で県内版トップの大きな記事が生まれるなど、夢にも思わなかったことである。

中山真一（愛知県名古屋市）

大沢鉦一郎 《裸の自画像》
油彩・キャンパス 80.3 × 60.6cm 1916 年



大沢鉦一郎（おおさわ・せいいちろう／1893-1973年）
愛知県生れ。1914年東京高等工業学校図案科中退。絵は独学。17年宮脇晴らと愛美社を結成。19・20年院展洋画部入選。19～21年愛美社展。28年春陽会展初入選。32年春陽会賞。46年日展特選。49年春陽会会員。73年没。79歳。

■ 大沢鉦一郎 《小さい椅子》

キャンバスの裏から出てきたもう一枚の傑作

二〇〇八年、生誕一一五年大沢鉦一郎展の準備のおり、私は《裸の自画像》を額からとりだしながら思わず声を出した。「あつ、もう一枚キャンバスが貼ってある」。木枠に二枚のキャンバス。さっそく上のキャンバスをはずすと、私はもう一度声を上げることとなった。「わつ、すごい絵だ。万歳！」。

下に貼ってあった作品《小さい椅子》（一九一九年作）のキャンバス裏を見ると、公募展に送付した形跡がある。しかし入選記録はない。どの展覧会かの落選作ということになる。落選の理由を誰かかれかに問いただしたくなってしまう。こちらを見ずえる少年の大きくて無垢な瞳。劉生とはまた異質の不思議がある。描く対象への母性的な愛情など感ぜられ、私は劉生より大沢先生が好きだ。

コンパクトに保管しようとしたということか。生前の回顧展などで額に入ってたままの《裸の自画像》が展示されてきたということは、大沢自身も下に貼ってあるこの作品の存在を忘れていたにちがいない。おぼえていれば自身の代表的な作として必ずや自選したことであらう。

生誕一一五年展のおりには、愛知県内二つの公立美術館に大沢作品をやはり数点ずつお納めしている。しかしこの二点の二五号作は、ご遺族にご相談し、〈どんなことでも公立美術館優先〉という社是（？）を曲げて、私どもの所蔵とさせていただいた。私どもが二〇〇九年から東海地方において年数回おこなっている「移動美術展」では、しばしばこの二点を対にして展示。二作品のあいだに貼られた「八九年ぶりに発見」の見出しがおどる新聞コピーを、来場者のだれもが興味ぶかげに読んでくださっている。

中山真一（愛知県名古屋市長）

大沢鉦一郎 《小さい椅子》
油彩・キャンバス 80.3 × 60.6cm 1919 年



大沢鉦一郎（おおさわ・せいichろう／1893-1973年）
愛知県生れ。1914年東京高等工業学校図案科中退。絵は独学。17年宮脇晴らと愛美社を結成。19・20年院展洋画部入選。19～21年愛美社展。28年春陽会展初入選。32年春陽会賞。46年日展特選。49年春陽会会員。73年没。79歳。

横井礼以 《丸髻の夫人》

フォーヴィストとして中央画壇で大活躍

横井礼以は、この《丸髻の夫人》（一九二三年作）について、一九六〇年刊行の『自選画集』で次のとおり自ら解説している。「この当時でも已に丸髻は過去への郷愁でした。ふだん丸髻などに結ったことのない当時としては最もハイカラな一夫人にお願いしてモデルになって貰いました。一見不調和であったかも知れないが、そこに過渡期の新感覚を覚えたのです。これは萬鉄五郎君の島田の裸婦と共通するものであったかもしれませんが。この作品は恰度石井柏亭さんが渡仏に際し日本の画壇をフランスに紹介するために、この外のもうひとつ《白衣の少女》を持って行ってサロン・ドートンヌに出品されたものです」。

横井は、東京美術学校を一九一一年に卒業後、二年連続で文展に入選した。そのあと画面にマチスの影響があらわれるようになって落選。一七年からは二科展入選、二三年には同会員となっている。マチスやヴラマンクらによるフォーヴィスムがフランスで始まって、はや二〇年ちかくがたっていた。日本の洋画壇でもフォーヴィスムは一大潮流となっていたものの、多くの日本人画家たちにとって本来のフォーヴィスムは必ずしもじゅうぶんに消化されていなかったかもしれない。

一方で、この作品ほどフォーヴィスムの本質に肉薄した作例は、当時の日本洋画にあまりなかったと思う。精神が躍動し、それゆえ色彩が輝いている。パリの識者らも、そう見たのではないか。ほどなく横井は、キュビズムもじゅうぶんに消化しつつ中央画壇で大活躍を続けている。

中山真一（愛知県名古屋市）

横井礼以 《丸髻の夫人》
油彩・キャンパス 60.0 × 49.5cm 1923 年



横井礼以（よこい・れいゐ／1886-1980 年）
愛知県生れ。1911 年東京美術学校西洋画科卒。
19 年二科賞。23 年二科会会員。30 年名古屋に
緑ヶ丘中央洋画研究所を設立。47 年第二紀会創
立会員。67 年名古屋造形芸術短期大学開学と
ともに名誉教授。80 年名古屋で没。93 歳。

■ 横井礼以 《秋草と赤蜻蛉》

心象性あふれる『日本人の洋画』をめざして

昭和にはいると横井礼以は、夫人の結核や自身の眼病ゆえ東京から郷里の愛知県へと転地療養した。そのころ、西洋絵画の新思潮を追いつめることへの疑念が心に芽ばえる。アトリエをかまえた知多半島・河和のゆたかな自然にも、目を見開かれるおもいであった。一九二九年に名古屋へ転居するまでの約二年半、セザンヌの研究を本格的におこなっていたこともあってか、いっそう自然に対する感覚が磨かれていく。

名古屋では緑ヶ丘中央洋画研究所の「指導主任」として後進の育成にも励む。自らはアニメズム的な自然観にもとづく『日本人の洋画』をめざすようになった。若き日のフォーヴィスムやキュビスムは、懐かかくに落とし込んでいく。生まれ育った愛知県（現）弥富市は、木曽三川水郷の地。水辺で小動物と戯れた記憶も身体に刻み込まれている。

この《秋草と赤蜻蛉》（一九四三年作）では、俯瞰する構図のなか、赤トンボが草むらを優雅に舞う。空が見えなくとも何かしら豊かさをたたえた空間。日本の秋がひろがる。生きとし生けるものへの共感であろうか。油彩という西洋の方法でみごとに「日本」が成り立っている。

海外に出ることもなく、眼病の治癒もなかなか叶わなかった。それでも横井は、戦後も心象性あふれる茫洋とした独自の作風を築きながら、晩年に至るまでますます充実した制作をなしている。

中山真一（愛知県名古屋市長）

横井礼以 《秋草と赤蜻蛉》

油彩・キャンパス 49.5 × 60.0cm 1943 年



横井礼以（よこい・れいゐ／1886-1980 年）

愛知県生れ。1911 年東京美術学校西洋画科卒。19 年二科賞。23 年二科会会員。30 年名古屋に緑ヶ丘中央洋画研究所を設立。47 年第二紀会創立会員。67 年名古屋造形芸術短期大学開学とともに名誉教授。80 年名古屋で没。93 歳。

■ 恩地孝四郎 《池畔（台湾風景）》

版画家の珍品油彩画か？ それとも……作家にとってのイメージは重い

版画家・恩地孝四郎である。装丁もライフワークの重要な位置を占めている。二〇〇八年に千葉市美術館で開催した展覧会「日本の版画一九四一年―一九五〇年 日本の版画とは何か」の図録をたどってみる。I「戦中の創作版画」の章のトップに恩地孝四郎が一九四三年に手がけたあの有名な《萩原朔太郎の肖像》がくる。IV「標本たちの箱庭」の章のトップに《南海への思念（一九四二年）》、V「焦土より」の章のトップに《失題（一九四六年）》、VI「戦後―抽象と具象のあいだに」の章のトップに《藤懸静也像（一九四九年）》、そして最終章VII「世界の舞台へ」のトップも《リリック No.6 孤独（一九四九年）》とすべて恩地孝四郎の版画作品で占められている。七章立てのうちの五章のトップに恩地孝四郎の作品、これぞ版画家・恩地孝四郎の謂れに他ならない。

一九一四年から一九二四年までの間、版画発表の場を失った恩地は、油彩画を描いて二科会などに発表していた。長くコレクションを続けてきた間、この作品ともう一点《白いポット》と題した油彩画を実見する機会を得た。版画家の描いた数少ない油彩画の珍品として見るべきか、絵描きの油彩画と見るべきか。

一人の芸術家の多様な一面として紹介するには、版画家・恩地孝四郎の名・イメージはとりたてて重い。

木村悦雄・正子（千葉県千葉市）

恩地孝四郎 《池畔（台湾風景）》
油彩・キャンバス 31.8 × 40.9cm 1921 年



恩地孝四郎(おんち・こうしろう／1891-1955年)
東京生れ。白馬会洋画研究所に通う。1912年藤森静雄、田中恭吉と交友し、木版画を制作。『月映』創刊。東京美術学校西洋画科中退。19年日本創作版画協会創立に参加。31年日本版画協会会員。36年国画会会員。55年没。63歳。

■ 小堀四郎 《谷中風景》

生前知られないことをあえて選択し、没後「名を成す」の例え

「明治三五年名古屋に生まれた小堀四郎は、昭和二年東京美術学校西洋画科を卒業、昭和三年フランスに留学。昭和八年帰国した。しかし昭和一〇年松田文相の帝展改組による美術界の混乱に際しての、恩師藤島武二の『画壇の悪風に染まるな、芸術は人なり。まずは人間を作れ。』という言葉を守り、以降年一回の美校同級生による上社会にのみ作品を出品することになった。事実小堀四郎氏はすべての画壇から離れ、孤高の歩みを続け……」（一九八六年、渋谷区立松濤美術館・小堀四郎展カタログの巻頭挨拶文より）。

小堀四郎は、師の言葉を守り、妻・小堀杏奴（森鷗外の次女）の生涯にわたる献身的な支えを受けながら、作品を売ることも譲ることもせず、孤高、清貧の人生を送り、老いてなお意欲的に制作を続け、一九九八年に九六歳で亡くなった。

世間一般が世の中に小堀四郎なる絵描きがいることを知り、その作品と生き方に感動したのは、小堀四郎晩年に開催した初めての個展による。この《谷中風景》に出会ったのは、それかなお時が過ぎること。場所は京都、一週間購入について悩み、決意の果て、妻と二人、新幹線の中を手荷物として千葉まで運び帰った。その時の喜びを昨日のこのように思い出す。市場に小堀の作品が出ることは極端に少ない。この作品は、小堀が美校時代に近親の方に贈られたもので、縁あってマイコレクションの一つになっている。

木村悦雄・正子（千葉県千葉市）

小堀四郎 《谷中風景》

油彩・キャンパス 60.7 × 50.0cm 1923 年



小堀四郎（こぼり・しろう／1902-1998 年）

名古屋市生れ。1927 年東京美術学校西洋画科卒。28 年渡欧。33 年帝展入選。34 年森鷗外の次女・杏奴と結婚。35 年帝展の松田改組に失望し、官展を離れて独自の制作に打ち込む。86 年渋谷区立松濤美術館で個展。98 年没。96 歳。

■ 牧野義雄 《夜のピカデリー・サーカス》

霧の倫敦を描いて名を馳せた日本人

石井柏亭の戦前著作『美術の戦』で画家を知り、日動画廊美術雑誌『繪』一九八六年連載の村田哲朗「霧の鋼次・牧野義雄伝」により詳伝を知る。作品は数年前、神保町の画廊で入手、来歴は不詳だが鎌倉近辺の縁者筋と推測している。一躍有名となった一九〇七年『カラー・オブ・ロンドン』口絵、一九一七年『画集ロンドン』表紙となった水彩代表作と同構図の油彩であり複数の作品が確認されている。画面右のエロス像は現在、広場のリージェント・ストリート側に少し移動しているが一〇〇年前と変わらぬ人や車の往来で賑わう名所だ。親交のあった原撫松の帰国後、原に絵を送りそれを売って故郷の甥の学資にしたというから故国にもその成功は伝わっていた。第二次大戦勃発の一九四二年、四九年ぶりに帰国した画家は重光葵の庇護のもと暮らすが、戦後は滞英時に描いた水彩と同構図を油彩でも描いたという。この作品もその当時のものかもしれない。一九三九年、松方コレクションの英国系作品を保管するロンドンのパンテクニカン倉庫が焼失、牧野の油彩も含まれていたという。それを惜しんで再現していたとも考えられる。このようなりめくは戦前まで頒布会など普通であったが創作性重視の戦後の美術史家や評論家には複製扱いに排除され埋没していった。しかし近年の豊田市の研究顕彰、ロンドン漱石記念館の恒松郁生氏による多数の画家著作の翻訳出版を機に画家の名は再認知されつつあるといえる。

福井豊（東京都荒川区）

牧野義雄 《夜のピカデリー・サーカス》
油彩・キャンパス 52.5 × 45.0cm 制作年不詳



牧野義雄（まきの・よしお／1869-1956年）
愛知県生れ。名古屋英和学校卒。1893年渡米。97年渡英。ゴールドスミス美術学校卒。1907～09年カラー・オブ・ロンドン、パリ、ローマ刊行。34年資生堂個展。36年三越個展。42年帰国。著書多数。鎌倉で没。86歳。

河合新蔵《十和田湖ブナ林》

水彩画の先達・隠れた関西の指導者

北陸地方の個人より購入した。時代を経た紙裏に「十和田湖山毛櫨林」とあり、これが本来の題であろう。山毛櫨と書いてブナと読む。画家は一九〇九年第四回文展で水彩《真夏の山毛櫨》で褒状を受ける。また一九二八年、宝文館発刊『室内装飾鑑賞画選』これは内外画家の複製を額装用に七〇枚ほど集めたものだが、画家の掲載は水彩《山毛櫨林》である。これによってもブナが画家の好んだ題材であったことが判る。大坂の何代が続く呉服商に生まれたが幸い次男であったので好きな洋画を学ぶことができたという。大阪の鈴木雷斎、神戸の前田吉彦に洋画の手ほどきを受け、のち一八九一年、上京して五姓田芳柳に入門、のち小山正太郎の不同舎に学ぶ。一九〇〇年、満谷国四郎、丸山晚霞、鹿子木孟郎らと渡米し翌年渡仏、アカデミー・ジュリアンに学ぶ。のちアカデミー・コラロッシにも学びラファエル・コランに師事して一九〇四年帰国、太平洋画会員となる。一九〇六年、大下藤次郎、丸山らと東京で水彩画講習所を創設して講師となる。一九一二年頃、京都紫野に移住し関西美術院の教授となり後進を指導、関西美術会の審査員なども務めた。一九一三年、日本水彩画会の創設発起人にもなっている。明治時代後半の水彩画隆盛期を代表する画家の一人であり関西の指導者として記憶されるべきであろう。しかし浅井忠や大下らビッグネームの影に隠れて忘れられようとしている画家の一人といえるのかもしれない。

福井豊（東京都荒川区）

河合新蔵《十和田湖ブナ林》
水彩・紙 33.5 × 25.0cm 1920 年頃



河合新蔵（かわいしんざう／1867-1936年）
大阪生れ。上京、不同舎に学ぶ。1900年満谷国四郎、鹿子木孟郎らと渡米。01年渡仏、ジュリアン、コラロッシに学ぶ。04年帰国、太平洋画会会員。06年大下藤次郎らと水彩画講習所を設立。13年日本水彩画会創立会員。京都で没。68歳。

■ 矢崎千代二 《ポン・ヌフ》

パステル一筋・世界を駆け巡った画家

橋脚を下から見る。パリ、セーヌ川シテ島を挟んで南北兩岸をつなぐ石造橋、「新橋」の意味だがセーヌでは最古の橋という。関西の個人よりお譲りいただいた。一九一七年頃よりパステルに転向した画家は一九二一〜二五年、パリを中心に過ごした。これを描いた一九二三年、五一歳の画家はパリで初個展を開催している。パリにいた石井柏亭がこれを手伝った。現地の美術雑誌五月号にも「パリの日本人画家」として取り上げられる。しかしその年の春はリューマチを患って絵の制作が困難になり、坂崎坦の勧めで随筆『絵の旅から』を執筆し始める。この年は関東大震災で帝展など団体展も全面中止されたが、翌一九二四〜二五年、東京朝日新聞に連載され一九二六年、単行本で刊行される。これにより画家の国内知名度は一躍高まる。世界中をパステル一筋に駆け巡った画家であるが病氣や怪我で何度も危ない目に遭っている。晩年の一九四一年、北京に移住し北京芸術学校で絵を教える。終戦後の混乱の最中、自作一〇〇八点を中国教育部に寄贈して一九四七年、北京で客死している。画家人生の晩年が幸せであったのか否か本人以外は知る由もないだろう。ヒマラヤを見るなど好奇心旺盛な漂泊の画家であったがその生活は質素であった。親しみやすい外光派描写は名所絵ハガキとして量産され、名手と謳われながら美術史上の評価は決して高くない。しかしこの分野のバイオニアで第一人者であったことに変わりはない。

福井豊（東京都荒川区）

矢崎千代二 《ポン・ヌフ》
パステル・紙 32.0 × 22.5cm 1923 年



矢崎千代二（やざき・ちよじ／1872-1947年）
横須賀生れ。曾山幸彦、堀江正章、黒田清輝に学ぶ。
1900年東京美術学校西洋画科卒。03～09年渡米欧。16～26年米欧、インド、南洋諸島を歴訪。
30～34年南米、中国、ジャワに取材。38年満州各地歴訪、41年北京に移住。北京で没。75歳。

■ 相馬其一 《ヴェニス風景》

心温まる風景を探し求めた洋画家

グランカナルから見た細い水路の奥に鐘楼が聳えている。ヴェネツィアではサンマルコの塔カンパニレが最も高く有名だが、他にも美しい教会の塔があちこちに散在する。そんな一つに目を留めて描いたのであろう。携帯に便利な軽い紙のキャンバスボードのサムホールに描かれている。画家は一九二一年、安宅安五郎と共に渡欧、仏、独、伊を巡遊した。当時の制作であろう。二年後に帰国して三越で個展を開催、その翌年、浦和にアトリエを建て絵画教室を開いている。作品は三〇年位前、当時は神保町にあった古民具骨董館の丁美術で入手した。柔らかな色調が気に入って、画家が蒐集作家の栗原忠二と同じ白日会創立会員で関連画家、と理由付け購入を決めたことを覚えている。同館はその後、池袋へ移転そして閉鎖、丁氏は神田猿樂町に個店を持って数年続けたが突然の病により早逝した。この絵を見る度に彼のことを思い出す。私と同年齢であった。画家について思い出すのは同じ頃、渋谷神南の画廊の壁面に掛けられていた出展作と思われる一〇〇号大の欧州風景である。仏郊外クラマールの家屋と街路を描いたものだったと記憶するが今となっては定かではない。とにかく秀作で良いものであったがそんな大きなものを飾る場所もなければ金もない。店主には価格も聞かず挨拶して店を出たが、あの絵は今どこにあるのだろう。どこかの美術館に収まっているのだろうか。その画廊は建て替えられて今は何の跡形もない。

福井豊（東京都荒川区）

相馬其一 《ヴェニス風景》

油彩・ボード 22.5 × 15.5cm 1923 年頃



相馬其一（そうま・きいち／1885-1966年）

新発田生れ。1905年上京。白馬会洋画研究所に学ぶ。新光洋画会創立会員。19～20年帝展に連続特選。21～23年渡欧。光風会会員。白日会創立会員。浦和に教室を開く。27～28年再渡欧。長野県に疎開。長野で没。81歳。

栗原忠二 《緑蔭の牧場》

英国に学んだ異色の風景画家

三五年以上前の私の絵画蒐集の出発点であり現在も研究対象である不思議な画家である。私の人生を変えた画家といってもよい。当初の栗原忠二限定蒐集がやがて関連画家から無関係なジャンルまで手を出し作品の置場にも困る現状だ。この作品は近年、赤坂一ツ木通りの画廊Aにて入手した。羊が点在する牧歌的風景、英国郊外おそらくコッツウォルズあたりの草原を描いたものだろう。樹影の下的人物は牧童ではなく画家自身であり山水画の境地なのだろう。画家は渡英間もない大正初期、高木背水ら日本人画家を支援し自らも描いた生理学者で画家のレオナルド・アースキン・ヒルの知遇を得て、氏の自宅のあるエセックス州ロートンに近いエッピングの森でスケッチや制作に勤しんだ。画家が大正皇后に献上した同じ構図の水彩《雨後の牧場》が宮内庁にあり一九九一年、静岡県立美術館で開催の栗原忠二展に出品された。会期中に静岡で全国高校体育大会があり臨席の皇太子殿下が途次同館を訪れ観覧された。随伴し案内と解説をしたのが同展を企画した当時同館学芸部長の下山肇氏である。その様子は高島屋提供の皇室テレビ番組で放映された。氏は二〇〇一年、尾道大学教授に就任、のち二〇〇五年、復帰し同館館長に就任されたが、同年病を得て急逝された。同展には所蔵作一〇点の出品と資料提供などでしたが、氏の研究からも多くの情報を教示いただいた。これからという時に残念で今もって惜しまれてならない。

福井豊（東京都荒川区）

栗原忠二 《緑蔭の牧場》

油彩・キャンバス 31.5 × 41.0cm 1925 年頃



栗原忠二(くりはら・ちゅうじ／1886-1936年)
三島生れ。1912年東京美術学校西洋画科卒、渡英。ブラングインに師事。王立美術家協会準会員。24年帰国、白日会創立会員、日本水彩画会会員。26年再渡英。第一美術協会創立会員。築地洋画研究所を設立。36年没。50歳。

大橋エレナ 《パリの公園》

夫の母国日本へ・その献身的愛

噴水のあるプールの水辺で若い母親たちが子供たちを遊ばせている。チュイルリー公園であろう。当時のアール・デコを偲ばせる装い、夏の平和な光景。大橋了介と知り合う前、旧姓サインとパリの表記がある。作品は関西の個人からお譲りいただいた。ブラジル人画家の父は仏人の母とパリ留学中に結ばれた。一六歳の時、一家でパリに渡るがその年の暮れ母を亡くす。一九歳の時、第一次大戦のためブラジルに戻る。再婚した父に抵抗し絵は中断、音楽学校でピアノを習う。二五歳の時、ブラジルの奨学生となり再度パリへ渡りグラン・ショミエールに通う。そこで了介と知り合う。同い年の二人が結婚したのは遅く三八歳、共通の師であるアマン・ジャンと妹が証人になる。同年、二人は日本に向かい東京で暮らす。エレナは松坂屋の服飾デザイナーとして働く。了介の滞欧作は春台賞を受賞するが銀座の滞欧作個展は不振、帝展も入選しなかった。四〇歳の時、エレナが大阪転勤になり二人は芦屋に暮らす。松坂屋ではエレナの個展や洋装展が次々に開催され、芦屋でも山本發次郎の令嬢らにピアノ指導をする。台湾、南米、日本で夫妻展を開催したが翌年、了介が死亡する。戦時下に遺作展を開催し戦後の一九四七年、仏文併記の色刷遺作集『大橋了介・生涯と作品』を編纂刊行する。私も一冊所有するが敗戦直後の物資不足、とても満足したとは思えぬ色調と紙質。しかしこれが彼女の夫への精一杯の追善であつたに違いない。

福井豊（東京都荒川区）

大橋エレナ 《パリの公園》

油彩・板 21.0 × 27.0cm 1928 年頃



大橋エレナ（おおはし・えれな／1895-1966年）
ブラジル生れ。1911年渡仏。27年グラン・ショミエールに学ぶ。33年来日。松坂屋服飾デザイナー。40年台北で夫妻展。40～41年南米で夫妻展。42年国内で夫妻展。47年大橋了介遺作集刊行。49年ブラジルに帰国。66年没。71歳。

大橋了介《サンパウロ》

青春の巴里・帰国後の挫折

画家作品を初めて見たのは一九八八年、日本女子大学成瀬記念館で開催の遺作展であった。新聞を読んで見に行った。その記事切抜きと簡易図録、パンフレットは今も持っている。この作品は入札式オークションで落札した。高い位置より描いた作品、サンパウロの表記がある。画面左は飛梁とステンドグラスの高窓を持つ典型的なゴシック式大聖堂、右側はそれにも負けぬ高さの高層ビル群、眼下にはそれに沿って商店が続き車や人の往来も俯瞰できる。一九四〇年、大橋夫妻は外務省の日伯親善美術使節としてブラジルを訪問、各地で夫妻展を開催、アルゼンチンでも開催し一九四一年、帰国した。ブラジル生まれのエレナの父が当時、サンパウロ美術学校の校長であったこともその理由であった。一九四二年、南米訪問時制作の夫妻展を東京、神戸、大阪で開催したが、時局は大きく変化し前年二月八日の真珠湾攻撃により開戦、美術雑誌も戦時の論調に変化して大きく取り上げられることはなかった。翌一九四三年夏、不調を訴え同年暮れに脳腫瘍のため四八歳で没している。横手貞美、荻須高德、山口長男と共に佐伯祐三を囲んで同行した渡仏期、エレナと出会ったグラン・ショミエール、岡田三郎助と共に巡った中欧の旅、青春の滞仏期の思い出が画家の脳裏をよぎったに違いない。エレナとの日本の暮らしは愛に満ちたものであったが、その画業は滞欧画家特有の風土的違和感に苦悩して挫折と不運を味わうものであった。

福井豊（東京都荒川区）

大橋了介《サンパウロ》

水彩・紙 27.0 × 36.0cm 1940 年



大橋了介(おおはしりょうかい／1895-1943年)
彦根生れ。台北一中卒、台湾総督府勤務。
1919年上京、本郷洋画研究所で岡田三郎助に
師事。27年渡仏。佐伯祐三らと行動。岡田三
郎助と中欧旅行。33年帰国。37年台北で個展。
40～41年南米で夫妻展。芦屋で没。48歳。

■ 武内鶴之助 《溪流》

雲と空・水と風・パステルの名手

季節は秋であろうか。岩肌の茶色や木々の赤と溪流の深みの濃い緑のコントラストが古信楽のビードロ釉を思わせる。右下の岩に殆んど見えない鉛筆サインがある。何処を描いたものか未調査で不明である。溪流上部に民家があり国内には違いないだろう。三〇年以上前、知る人ぞ知る千駄木団子坂M洋画店で購入したもの。三五年前、私が最初に買った油彩が栗原忠二のヴェニス、M氏からであった。M氏の店には毎週のように通って色々教わったものだが一〇年ほど前、高齢で不自由になられ廃業された。武内も英国に学びブラングインとも関係があり即決したように思う。武内の絵を最初に見たのもその少し前、今は浦和の近美にあるが当時は大宮の博物館にあった油彩の傑作《アラシの夕》であった。後に目黒で大規模な回顧展が開催され多くの作品を見ることができた。疎開した妻の実家のある下館町役場で戦時中に開催した個展案内を最近入手した。三宅克己の長文の推薦文「非常時の絵画鑑賞」と共に「私の絵」と題し画家は短文を記している。「私の絵は、眼で観て楽しむ絵で、頭を使って考へる絵ではありません。私の絵は、特に新しい画風でも無く、さりとして別に古い画風とも思いません。唯千古不變の自然美を如実に描写する画風に外なら無いのであります。私の絵は、それが最高の芸術であるか否やは別として、少くも勢一杯の努力を尽して描いた事だけは確です。」当時六三歳の画家の心境が垣間見える。

福井豊（東京都荒川区）

武内鶴之助 《溪流》

パステル・紙 27.0 × 36.0cm 制作年不詳



武内鶴之助（たけうち・つるのすけ／1881-1948年）
横浜生れ。白馬会洋画研究所に学ぶ。1909～13年渡英。ブラングイン、スワン、クイン、イースト、スタットに師事。ロイヤル・アカデミーやインスティテュートに入選。13年帝国ホテルで個展。日本パステル画会顧問。48年没。66歳。

■ 三井良太郎 《ブリーズ・ミシエ通り》

美の国を満州に夢見た洋画家

人の気配のない場末の裏通り、両側の建物が挟むように迫って寂寥感を漂わせている。セーヌ右岸パリ四区、現在は北がポンピドゥーセンターに突き当たり南はサンメリー教会に至る通りである。この作品は神田神保町の1画廊が見つけてくれて入手できた。ハルビンで作品予約の募集をして渡欧資金を捻出した画家は一九二七年、シベリア鉄道の三等車で病弱の妻を同伴して渡仏する。当初パリでは芝居の背景描きをするなどして苦労を重ねる。そして翌年、妻を亡くす。以降はそれを忘れるかのように在パリの日本人美術家達の展覧会にも積極的に関与して出品する。一九二九〜三〇年には各種サロンにも出品して絵も売れるようになったが、元満鉄理事で男爵の大蔵公望の個人的支援もあって以降四年間は出品を止めてルーヴルで古典美術研究と模写に専念する。この頃よりパリ東方郊外のマルヌ河畔の家を借りて住みバスと地下鉄を乗り継いでルーヴルまで通ったという。この作品はそんなある日、途中下車して描かれたものである。これを含めて三点の油彩を蒐集している。しかし戦前の作品集などで見る写真以外の他の実物を見たことがないのである。大正中期に満州に渡り絵画指導をしたバイオニアであることは鶴田吾郎の『半世紀の素描』にも記載されているが現在にはほとんど忘却された画家とあってよい。しかし私にとっては幻の画家であり、その人生も含めて謎も多く今後も研究を続けていきたい画家である。

福井豊（東京都荒川区）

三井良太郎 《ブリーズ・ミシエ通り》

油彩・板 22.0 × 15.4cm 1933 年



三井良太郎（みつい・りょうたろう／1890-1937年）

東京生れ。白馬会溜池入門、黒田清輝に師事。1908年同葵橋洋画研究所幹事。16年渡満、大連洋画研究所を設立。満鉄沿線で巡回指導。22年満鉄事務嘱託。27〜36年渡仏。37年再渡満、新京洋画同好会を開設。新京で没。47歳。

■ 荒井龍男 《或る風景（於パリ）》

日本人離れした画家

「荒井の風貌と印象はわたくしがそれまで接した誰よりも特異であった。いってみれば日本人というよりもスラブ人かと思われるような……」。山口薫（自由美術家協会・モダンアート協会で荒井と一緒に活躍した）

荒井龍男三〇歳、一九三四年の渡仏直後に描かれた作品です。二八歳のとき、第一九回二科展で初入選し、画業に専念するようになったので、画家としてのスタートは遅いほうです。

画面の三分の一ほどのところに洗濯物が万国旗のようにカラフルに描かれています。コンクリートの堅牢な建物と、軽やかにロープに結ばれて空間を横切る生活の息吹を感じさせるものを配置して、画面の構成も良く考えられています。路上の一人の人は何なのでしょうか、ひきつけられる魅力を持った私の大好きな絵の一枚です。

荒井龍男の画業は二〇数年足らずの短い期間でした。終戦後の、移動するにも困難な中、国内はもとより海外に於いて個展を開催して活躍しました。その行動のパワフルなことは画家の仲間内でも有名でした。

その間にも作風を変化させているので、一時期の作品を見て評価はできませんが、初期のこの絵のようなものから晩年の抽象まで一貫して、その絵のなかに詩的なものを感じます。荒井は『牧羊神』という詩の同人誌を発行した詩人でもありました。

野原宏（埼玉県久喜市）

荒井龍男 《或る風景（於パリ）》
油彩・キャンパス 60.6 × 50.0cm 1934 年



荒井龍男（あらい・たつお／1904-1955年）
大分県生れ。太平洋画会研究所に学ぶ。1934～36年渡仏。ザッキンに学ぶ。37年自由美術家協会会員。50年モダンアート協会創立会員。NY リバーサイド美術館、サンパウロ近代美術館、ブリヂストン美術館で個展。55年没。51歳。

■ 遠山五郎 《赤いシヤンタユ》

待ってました！ 五郎さん

まさかの遠山五郎滞欧作、それも代表作として知られている名品を入手してしまった。遠山は印象派で出発したが次第に脱皮して独自の芸術観によって新しい画境を切り開き、穏やかな人柄で芯が強く、その鋭い感性からは明るく高雅な作品が生まれた……。『新豊前人物評伝』（中村十生著）には長命ならば文化勲章も間違いない画家であったと絶賛されている。誤魔化しハッタリのない欧米仕込みの画力に加えセザンヌ、ゲランを独自に消化した深みのある優品である。現存作品も少なく、市場にもほとんど出てこなく、特に滞欧時代の出品作は幻と言われている。日本洋画の歴史においても貴重かつ重要な作品である。師のゲランも日本人画家の中では最もその実力を認め、他の邦人大家に自慢していたという。病床の中村彝像を描いたため結核が感染し、体力が落ちている時に虫垂炎を併発し急逝（享年四〇歳）したのである。危険を顧みず親友彝を命がけて描いた信義の人でもあった。五郎の面目躍如たる一面だが、その代償はあまりに大きかった。このように「一将功成りて万骨枯る」の喩え通り、彝の周辺には力のある仲間が存在があったのは周知の通りだが、それらの全貌を明らかにするのは困難を極める。しかしこの一点で遠山五郎を偲ぶには十分な作品と思っている。同時期の彝の婦人像の画風がこの作品に酷似しているのも何かの偶然だろうか？ 日本洋画の福岡山脈の一峰を立派に形成している遠山五郎山は今もその輝きと威厳を失っていない。

平園賢一（神奈川県平塚市）

遠山五郎 《赤いシヤンタユ》
油彩・キャンパス 72.7 × 60.6cm 1920 年



遠山五郎（とおやま・ごろう／1888-1928年）
福岡生れの洋画家。1911年文展初入選、14年東京美術学校卒。同年渡米。19年ニューヨークに学ぶ。20～22年渡欧。ゲランに師事。仏官展に入選。22年帝展で特選。24年光風会会員。中村彝の肖像画を描く。東京で没。40歳。

■ 里見勝蔵 《シャポンバルの寺》

憧れの風景

この作品は里見の初期滞欧作であり、一枚は無理をしてでも手元に置きたい絵好き憧れの作品でもある。独立美術協会創立会員の初期優品を蒐集対象の一つとしている私にとって、中山巍の次に気になるのが里見勝蔵であった。里見は実に多くの優れた洋画家と親交があり、その一方で数多くの若手を発掘育成している。里見なくしては陽の目を見られなかった、多くの画家たちがいた事を忘れてはならない。まさに日本洋画界の不世出のリーダーであり、コーディネートでもあった。画業は言うまでもない。

シャポンバルという地名を特定する為に、山内滋夫氏には本当にお世話になった。ゴッホもこの地を描いている。小さな田舎の教会も日本人の里見が描くと、ヴラマンクよりも風情があつて私は好きだ。『国家の品格』を読んで、改めて明治生まれの洋画家の作品を見てみると、日本人に染み付いた独特の美意識（自然観・無常観）が感じられて胸が熱くなる。虫の声を雑音としか聞こえない欧米人には描けない、日本の洋画を描いていたことが分かるような気がする。重い雪雲の合間に覗いた一瞬の青空をドラマチックに描いたこの小品に、師であるヴラマンクにも描けない日本人の美意識が見て取れる。初期里見の優品である。

平園賢一（神奈川県平塚市）

里見勝蔵 《シャポンバルの寺》
油彩・キャンバス 31.8 × 40.9cm 1924 年頃



里見勝蔵（さとみ・かつぞう／1895-1981年）
京都生れの洋画家。関西美術院に通う。1919年東京美術学校卒。21～25年渡仏し、ヴラマンクに師事。26年「1930年協会」創立会員。27年二科賞。30年二科会員、独立美術協会創立会員。59年国画会会員。81年没。85歳。

■ 川島理一郎 《ナポリ・ポッツオリの岡》

日本初のコスモポリタン画家

川島は、日本人として初めてフランスの官展に入選し、一九二〇年代の邦人としては他の追随を許さない破格のコスモポリタン（日、米、仏を股にかけマチス、ピカソなどと交流）であり、日本の近代洋画界に多大な貢献をしてきたにもかかわらず、正当な評価が長い間なされなかった悲運の画家とされている。その理由は、滞欧期の代表作数百点が二度の災難（関東大震災と貨物船沈没）で失われたこと、そして日本の美術学校を出ていないことなどが遠因となっている。しかし、幸運にも二〇〇二年一月から五月にかけて、二五年ぶりに川島画伯の回顧展が栃木県立美術館と足利市立美術館で行われ、この作品も新発見として出品され高い評価を受けることができた。川島芸術のささやかなリベンジとなった。

数多の洋画家がいる中で、ぐるりと回って元に戻ると、やはり「川島でしょう」という事になる。「東洋のマチス」「西洋の池大雅」の異名を持つ彼の油彩は、日本人でしか描けない世界に通用する特質を十二分に備えている。ただただ、画品高く颯爽と美しく大胆だが繊細、まさに明治人＋コスモポリタンの川島でしか描けない香り高い作品なのである。誰がこの作域に達する事が出来ようか！ 先入観なくゆっくりご覧下さい。どうか、皆さんも「やっぱり川島でしょう」という事になりますように。

平園賢一（神奈川県平塚市）

川島理一郎 《ナポリ・ポッツオリの岡》

油彩・キャンバス 37.9 × 45.5cm 1925 年



川島理一郎（かわしま・りいちろう／1886-1971 年）
栃木生れの洋画家。1905 年渡米し、のちに渡欧。度々外遊。22 年サロン・ドートンヌ会員。26 年国画会洋画部を創設。35 年国画会を退会。36 年女子美術学校教授。48 年日本芸術院賞。55 年新世紀美術協会を創立。71 年没。85 歳。

■ 中山 巍《老人像》

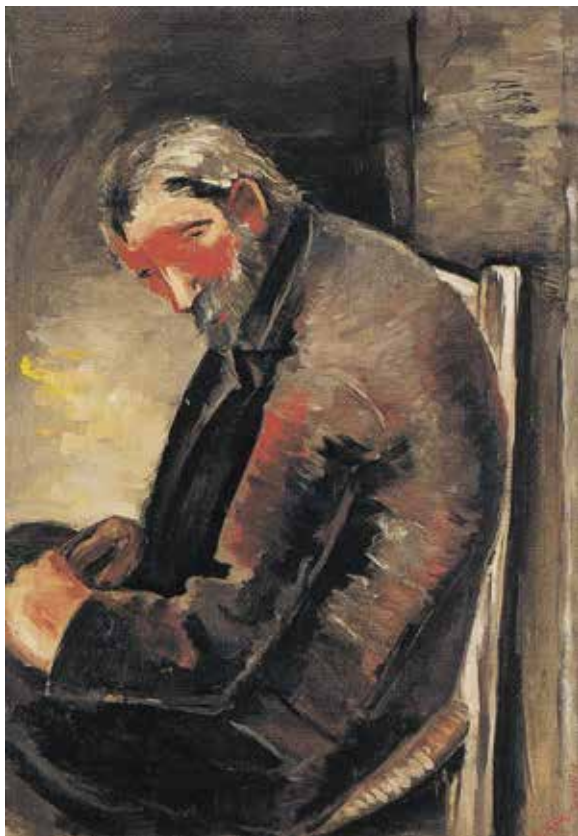
行方不明だった代表作

日本洋画の転換期に大きな役割を果たした団体がある。独立美術協会である。その創立会員の面々は誰もが個性的で魅力的だ。その中で埋もれていた一人が中山巍であり、私の好きな作家でもある。人は中山を「沈黙の画家」と称していたが、沈黙などしてはいられない。私は中山巍の日本一のコレクターになることを決めた。やがて画商たちは「お前が中山の相場を作った」と言うまでになった。発掘顕彰者にとっては最高の賛辞である。今では中山の画業が俯瞰できるまでのコレクションとなった。そして、私を待っていたかのように二〇〇四年、AJCオークションに長い間行方不明であった滞欧期の代表作《老人像》が出品された。さすがに驚いた。覚悟を決め胃の痛くなる思いで落札した。この作品を狙っていた御仁が私の話を画商から聞いて、手を引いてくれたことを後から聞いた。この作品こそ、戦前のどの図録にも掲載されていないあの《老人像》そのものであったのだ。中山研究の第一人者である柳沢秀行氏も貴重な発見と喜んでくれた。滞欧時代の中山を佐伯祐三は「今いる日本人画家で一番いいのは中山君だ」と絶賛しているし、伝説ともなっているズボロフスキー画廊での大成功（この老人像も出品されている）は世界に通用する中山の独自性を物語るものである。この一枚にその答えがある。

平園賢一（神奈川県平塚市）

中山 巍《老人像》

油彩・キャンパス 90.9 × 65.2cm 1927 年



中山 巍（なかやま・たかし／1893-1978年）

岡山生れの洋画家。1919年帝展初入選。東京美術学校卒。22～28年渡仏。里見勝蔵、前田寛治らと交友。28年二科賞。30年独立美術創立会員。46年女子美術大学教授。52年日本芸術院賞。独立美術協会の重鎮。78年没。84歳。